

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 27 日現在

機関番号：12602

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2014～2015

課題番号：26884032

研究課題名(和文) ミクロネシア地域における日本語借用語の流入・変容・衰退の歴史社会言語学的研究

研究課題名(英文) A historical sociolinguistic study on the Japanese loanwords in Micronesia

研究代表者

今村 圭介 (Imamura, Keisuke)

東京医科歯科大学・教養部・助教

研究者番号：00732679

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題は、ミクロネシア地域のパラオ語とチューク語に焦点を当て、日本語借用語の使用がどのように変化しているかを、異なる世代間の比較から明らかにすることを目的とした。結果として、日本の委任統治時代の影響から多くの日本語借用語が継続して使われているとともに、戦後の社会的な変化も大きく、世代間で段階的に日本語の借用語の使用が減少していることがわかった。研究結果は、a)パラオ語における日本語借用語の使用変化 b)同、音韻変化、c)チューク語における日本語借用語の使用変化、に分け3本の論文として発表している。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to describe the change of Japanese loanwords in two languages of Micronesia, Palauan and Chukese, through the comparison of the existing generations of each language. Based on our findings, it has become clear that the Japanese loanwords are still deeply rooted within the languages because of the significant impact of the Japanese colonial period; however, the usage of Japanese loanwords is gradually decreasing in these languages on account of the social change after the war.

We have published three papers focusing on the phonological change in Palauan, the lexical change in Palauan, and the lexical change in Chukese.

研究分野：社会言語学

キーワード：日本語借用語 ミクロネシア パラオ語 チューク語

1. 研究開始当初の背景

近年、日本の旧植民地において残存する老年層話者の日本語体系が注目され、その実態解明が行われてきた(簡 2011『台湾に渡った日本語の現在』、ロング・新井 2012『マリアナ諸島に残存する日本語』、朝日 2012『サハリンに残された日本語樺太方言』など)。さらに、日本語と現地語と接触して発生したピジン・クレオールなどにも注目が集まり、現在調査研究が進められている。共に当時の特殊な社会言語学的环境、その後の歴史の中で作られた日本語変種を明らかにするという点で、日本語史、社会言語学の分野で非常に重要な研究である。これまで同様の研究をミクロネシア地域で行う研究過程で日本語が現地語に与えた影響の大きさと複雑さに気づき、本研究の構想に至った。

戦前生まれの老年層話者の残存日本語、その下の世代のピジン・クレオールと共に、日本語接触の結果起こった現象として、現地語での日本語語彙の借用が挙げられ、ミクロネシア地域には、大量の日本語語彙が取り入れられた。その点については、比較的早く注目されてきた(杉田 1979「ミクロネシア諸語に与えた日本語の影響：予備調査報告」、由井 1990「ミクロネシア諸語に取り込まれた借用語対照表」)。しかし、杉田(1979)は研究の発展可能性について触れられている短い論考であり、由井(1990)は既存辞書から語彙を整理するとどまっている。近年、より詳細な論考(Matsumoto 2010 “Palauan language contact and change: a sociolinguistic analysis of borrowing in Palauan”)が見られ、辞書から抽出した複数の語源の借用語に関して、語種比較などから、それぞれの言語のパラオ語への影響の考察が行われている。しかし依然として、フィールドワークに基づく詳細な借用語の調査研究は見られず、フィールドワークから借用語の音韻変化や意味用法変化、経年による使用の変化などを詳細に解明することが望まれると考え、本研究に取り組んだ。

2. 研究の目的

本研究の目的は、ミクロネシア地域のパラオ語とトラック語に注目して、現地での聞き取り調査を基に、日本語借用語の音韻変化、意味用法の変化、経年による語彙の維持と衰退の実態を明らかにすることである。その結果を基に、ミクロネシア地域での短期的、長期的な日本語の影響を記述する。

3. 研究の方法

本研究では、借用語に関する資料収集、整理、理論的記述・考察を行った後、パラオ・チュークにおいて聞き取り調査を行い、日本語の影響の諸側面を明らかにした。まず既存のパラオ語、チューク語の辞書と現地での収集資料などを基に、各言語の日本語借用語のリストを作成した。リストの借用語からその

音韻変化の体系の記述、原語(日本語)の意味用法の記述・整理を行った。

パラオ語では、リストと記述資料を基に、現地語の話者に対して、a)借用語の音声調査、b)借用語の意味用法の調査、c)借用語の維持・衰退、の調査を行った。a)、b)は各語につき1人の話者に、c)は6人の話者に対して行った。パラオ語、書記体系が完全には確立していないため、音声辞書(New Palauan English Dictionary)に載っている綴り通りであるかどうかは定かでないため、記述した音韻変化の体系の一つ一つの音、また綴りが一定しない語の発音をしてもらい、IPAによる記述を行った。チューク語でも同様の調査を計画していた。

4. 研究成果

まずパラオにおいて、収集した900語程度の日本語借用語に関して、世代の異なる6人のパラオ語話者に対して、その使用の変化を考察した。結果、世代・また家庭状況によって使用する借用語の数が大きく違うことが分かった。

まず、年齢が低いほど日本語借用語の使用数が少なくなる傾向が見られた。使用数が最も少ない若年層話者の「使用する」回答語彙数が320であるのに対して、中年層話者の「使用する」回答語彙数は623で、使用する日本語借用語の数は倍近く異なる。そして、「使用する」回答語彙数が320である話者は私立高校出身であるのに対し、公立高校出身の若年層話者2人の「使用する」回答語彙数の平均は382である。当該話者が通った私立高校は英語による教育が中心であるため、英語借用の使用も多く、日本語借用語の使用がそれに比例し少なくなっていると考えられる。全体として、日本語を解する世代が臨時借用的に使っていた語が、以降の世代で自然に使用されなくなったことと、英語借用語への置き換えが大きな要因となって、日本語借用語の使用数が減少している。

さらに、借用語の中では、高年層が使用する意味と中年層・若年層が使用する意味が異なるものや、新しく使用されるようになった借用語も見られた。例えば *chosarai* は、「お手玉」から「堅い枕」の意味に変化している。感触や形状からの類推で意味が変化したと考えられる。*kozukai* は元々の「小遣い」の意味から「外国に行くときに親族などからもらうお金」に意味縮小している。英語の *allowance* がパラオ語に入ったことからの変化だと考えられる。また、*siotots* は「衝突」の意味から「乾杯」の意味に、*tsukarenaos* が「仕事帰りに一杯やる」という意味で新たに語が作られている。これらは、ツアーガイドなど日本人との接触が多いパラオ人が新たに作ったと言われる。このように日本語を解する世代がほとんどいなくなっている現在、パラオ語の中の日本語借用語の使用は減少し、いくつかの語の意味も元の日本語の意

味から離れていることが分かった。

また、音韻変化を調べた結果、戦後世代の話者の間で、その借用語の発音に変化が生じている様子が明らかになった。日本語から入った音素/h/, /p/, /f/は保持され、音素/z/と長母音の区別の衰退、一部/ts/の発音の変化、/?/の付加規則の変化が起こっていることが明らかになった。また、そのような音韻変化も一因となり、日本語借用語の綴りに混乱が起こっていることも明らかになり、今後現地の機関と解決していくべき課題となった。

チューク語に関しては、現地の大型台風の被害の影響や、予想以上に研究で明らかにすべきことが多かったこともあり、当初の予定通りに研究を進めることができなかったが、今後の研究につながる有益なデータの収集を行うことができた。まず、若年層話者二人に対して日本語借用語の使用調査を行ったところ、パラオ語の場合と同程度に使用数の減少が見られることがわかった。また、辞書に記載されている意味と調査で分かった意味が異なる単語も多く見られた。さらに多くの借用語に意味拡張、意味縮小、意味推移それぞれの変化が見られ、この点の記述を行った。意味縮小の絵例として、借用語の *Chuumwong* 「注文」は船便で頼む物資のみを指し、レストランの注文などに使わない。意味拡張の例としては *Ami* 「網」が、防虫用の網や網戸だけではなく、シャワーで体を洗う時に使う網状のタオルなども指す。パラオ語に比べチューク語は辞書資料の情報量が少ないため、このように借用語の意味を詳細に記述していくことが当面の課題となる。その後、世代間の違いを明らかにしていくことが必要であろう。

また、辞書に記載のない日本語借用語も収集のために、聞き取り調査を主に行ったところ、新たに 40 語以上の語を収集することができた。短い期間の聞き取り調査で多くの借用語が収集できたため、継続調査をし、借用語リストの数を増やしていくことも今後の課題となる。

結果の総論としては、日本の委任統治時代の影響から多くの日本語借用語が継続して使われているとともに、戦後の社会的な変化も大きく、世代間で段階的に日本語の借用語の使用や影響が縮小しているということである。しかし、正確な記述を行うために今後調査を拡大していく必要がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3 件)

ロング・ダニエル、今村圭介 (2016) 「チューク語の日本語起源借用語にみられる音韻対応と意味変化」『人文学報』512(7):55-74 (査読無し)

Keisuke Imamura & Jonathan Masaichi (2016) “Phonological Change of Japanese Loanwords in Palauan: Toward the standardization of spelling of loanwords” 『東京医科歯科大学教養部紀要』46:35-46 (査読無し)

ロング・ダニエル、今村圭介 (2015) 「日本語が公用語として定められている世界唯一の憲法 パラオ国アンガウル州憲法」『人文学報』503:61-77(査読無し)

〔学会発表〕(計 2 件)

— 今村圭介 (2015) 「パラオ語における日本語借用語の変化」(日本語学会 2015 年度秋季大会)

— 今村圭介 (2015) 「パラオで話されている日本語」(東京音楽会沖縄支部第 63 回例会)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

今村 圭介 (IMAMURA, Keisuke)
東京医科歯科大学・教養部・助教
研究者番号：00732679

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：